HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カトリック学校の宗教教育の実践と課題 ： 教科指導と学校生活を中心に
Author(s)	近藤, 望
Citation	北大宗教学年報, 2, 33-37
Issue Date	2019-08-31
DOI	https://doi.org/10.14943/90378
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75431
Type	departmental bulletin paper
File Information	hil_reli_2-4.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【報告】

カトリック学校の宗教教育の実践と課題
――教科指導と学校生活を中心に――

近藤　望

1. はじめに

本発表は、発表者の勤務先である学校法人札幌光星学園札幌光星高等学校の宗教科の授業実践例に基づいたものである。

学校法人札幌光星学園は、1817 年、フランスで創立された男子修道会であるマリア会が母体となり、1934 年に開校され、創立 85 周年を迎えた。マリア会の創始者であるシャミナード神父は、フランス革命によって荒廃した自国の姿を目の当たりにし、青少年の教育に身を捧げることを決心し、フランスの将来を担う上位層に対しての教育を施すことを目的に、中高生への指導に傾注した人物である。

シャミナード神父は「社会のリーダーとなる人物」を学校教育の中で育成し、その人が社会の中で自分の力を他者のために働かせ活躍することができることを目指した。その理念を受け継ぎ、本学園も「地の塩、世の光」を校訓に掲げ、「キリスト教の教えに基づいて他者の幸せのために力を発揮でき、人々に希望をもたらすことにより、世の中をより良くしていける人材を育てる」という目標のもと、生徒の教育活動を行っている。中でも「家庭の精神」で接することを重んじたシャミナード神父の意志を受け継ぎ、本学園も、家庭で親が子どもに接するように、学校でも教員が生徒一人ひとりに慈しみのまなざしを持って接することを大切にしている。その理念を、筆者は週 1 回の宗教の授業を通して、生徒たちに伝えようと試みている。

2. 授業実践例―「食」―に関する授業

2.1. なぜ宗教で「食」なのか？

聖書には、実際に大事な場面ではイエスが食事をしながら教えを説いている箇所が多くみられる（Mk.2:13-17、Lk.15:11-32 参照）。その最も重要な場面が「最後の晩餐」である。ここでイエスは「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（Jn.13:34）という、最大の掟を弟子たちに与えた。この掟は、ルカ福音書でも述べられる掟「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あ

なたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい。」（Lk.10:27）とともに、キリスト教が最も大切にしている教えである。この最後の晩餐の再現がローマ・カトリック教会で行われているミサであり、パンと葡萄酒、つまりは食を通して、神と人間との契約が繰り返され、その度に絆が強められることを再確認する儀式なのである。イエスが身分や立場に関わらず、すべての人を自らの食卓に招いており、自らの命が犠牲となってでも、その信念を伝え貫いていった姿が聖書を通して読み取れる。つまり、イエスにとって日々の食卓は神の愛を伝える場所であり、かつ、命がけの行為だったのである。命をかけてでも人間を守ろうとする姿、それは親が子どもを無条件に愛する姿、無償の愛と共通する部分でもあるだろう。

2.2. 授業実践例

「食」は日々の生活の中に直結しており、生徒にとっても身近な話題である。そこで筆者は、実際に高校 3 年生を対象に授業を展開した。授業概要は以下の通りである。

【授業テーマ】

「生きることは食べること、食べることは生きること」――「食」を通してみる愛の形――

【指導計画と目標】（計 4 時間）

①“弁当力”を考える（1 時間）……本時

：日頃、食事を作ってくれる家族や身近な人の思いを知り、大切にされていることに気づく。

②“いのちをいただく”ことを考える（1 時間）

：食を通して、多くのいのちをいただいていることに気づき、いのちを尊ぶ心を育む。

③“分け与える”を考える（1 時間）

：食に関する世界の実状（飢餓と飽食）に目を向け、その課題を自分のこととして捉えるきっかけとする。

④“最後の晩餐”を考える（1 時間）

：最後の晩餐を通してイエスのメッセージを読み解き、食事の大切さを再確認する。

【実施クラス】

高校 3 年生センタークラス（4 クラス）　計 151 名（男子 95 名、女子 56 名）

【事前準備】

①「食」に関するアンケートの実施及び集計

②授業プリント作成

【評価】

①日頃の食事に込められているさまざまな思いに気づき、感情や気持ちを素直に表現できる。

②食事を口にするまでの過程に目を向け、動植物・生産者・食事を用意する人々のいのち（＝時間・愛情）を受け取っていることに気づき、いのちの尊さを再確認することができる。

③世界の食料事情に目を向け、その原因と解決策を考えるきっかけとすることができる。

④イエスの教えを通して、改めて食事の大切さを再確認することができる。

＊毎時間、感想を記入させることで、授業への参加度、興味関心等を図る。
感想には個別にコメントを添えて次週フィードバックを行う。

【指導内容】

展開	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導入 (5 分)	出欠確認、お祈り 前時の復習	 アンケート結果の紹介	
展開① (25 分)	「思い出のお弁当」	アンケートより「思い出のお弁当」を紹介	お弁当を作った人の思いが込められていることに気づかせるよう導く。
展開② (10 分)	「弁当力」を考える	「お弁当ばこのうた」 「弁当力」について説明	歌詞に注目させる お弁当（食事）を作ってくれる人がどのような思いで準備しているかを考えさせ、お弁当（食事）を通して伝えられるメッセージに気づかせる。
まとめ (10 分)	 「弁当力」とは	感想記入、回収	プリント配布 日頃、お弁当（食事）を作っている人に伝えたいことや、授業を通して感じたことなどを自由に記入させる。

			食事を通して大切にされていることに気づかせる。

【授業後の生徒の感想（一部抜粋)】

- 作ってくれる人に「ありがとう」とか「美味しかった」という感謝の言葉を伝えたい。
- いつも当たり前のように作ってもらっている食事の裏を考えると、当たり前ではないし、むしろ当たり前のように感謝し「ありがとう」を伝えなければならない。
- 人のために何かを作る、してあげるということの尊さや素晴らしさを改めて感じた。
- 自分のことを思って時間を割いて、愛情を注いでくれていると改めて思った。
- お母さんの料理は食べられる時にたくさん食べたいな！！
- 毎日食べた後の弁当箱を洗ってくれ、そのときに嬉しい気持ちになってほしいので、これからも毎日残さず食べるようにしようと思った。
- 自分の皿を自分で洗うくらいはして、お母さんに少しは自由な時間を作ってあげたい。
- 今日でお弁当最後っていう日にするサプライズを考え中……。
- 高校を卒業した次の日に丸一日ご飯を母へ作ろうと思った。
- 毎日三食作ることは結構大変だよな～って考えた。自分が暇で作れる時は、作ってあげるのも良いかな。
- 来年から家を出るので、一人でも頑張って三食作ろうと思う。
- 「お弁当ばこのうた」で少し泣きそうになった。「毎日渡すお弁当はあなたへのお手紙」が印象的だった。自分の親もそういう気持ちでつくってくれたのかな。
- 将来結婚して子どもができたら、奥さんだけに任せるのではなく、少しは自分も負担してあげたい。
- 自分が将来誰かにお弁当を作る立場になったら、母がしてくれたように愛情を持って想いを詰めたい。

【授業成果】

「食」を通じて、生徒は日々目に見えない家族や身近な人からの愛情に気づき、当たり前に食事ができることに感謝の気持ちを持つことができたようにうかがえた。

3. 学校生活における宗教教育と今後の課題

宗教教育は週 1 回の宗教の授業だけで完成されるものではなく、学校生活全般を通して養われるものと考えられる。そこで本学園では、学校全体の取り組みとして以下のような活

動を行っている。

①宗教講話（月１回）

放送によるマリア会司祭の講話。毎月学園にまつわる話や聖書を元にした講話が行われ、授業では扱わないキリスト教に関する出来事にも触れ、視野を広げる機会とする。

②ボランティア活動

宗教部が主催となり、各種ボランティアを行っている。例えば募金活動への参加・実施（あしなが学生募金、西日本豪雨災害被災地のための募金)、カトリック札幌司教区のホームレス支援団体「みなずき会」が行っている「炊き出し」に必要なお米の援助を行うことを目的とする「米一合運動」などがある。さらに、各学年においては、学校周辺の除雪ボランティアや、老人ホーム等を訪問し清掃ボランティアなども行っている。

これらの活動を通して、将来「地の塩、世の光」として活躍することを期待される生徒の、隣人愛を育むことができるよう願っている。

このような環境の中で過ごす生徒にとって、学校は常に「家庭の精神」を忘れずに、居場所を提供し続けていくことが、この先も求められるだろう。また、こうした環境の中で宗教教育を受けた卒業生が、現在社会でどのような活躍をしているのか、という点に注目することも、宗教教育の成果を図る一つの指標になると思われる。

さらに、教職員への宗教的寛容も不可欠であろう。カトリックの信者数が年々減少している日本社会においては、信者の教員を多く擁することはますます困難である。今後、カトリック学校としての存続を維持していくためには、信者・未信者という枠にとらわれずに、教職員一人ひとりが建学の精神を十分に理解していくことが必要である。そのためにも教職員の意思疎通、情報交換が何よりも重要になってくると考えられる。また、学校生活におけるボランティア活動などの宗教教育が、形骸化すること無く、意味のある活動になるよう導いていくことが必要であろう。

最後に、建学の精神を伝える重要な教科を担っている宗教科教員として、より生徒の興味に即したテーマでの授業展開を試み、豊かな心を育むことができるよう、研究を続けていく所存である。